

中世宇都宮氏と東大寺大仏殿の復興

栃木県立博物館 学芸員 山本 享史



宇都宮朝綱が復興に携わった東大寺大仏殿(奈良県奈良市)

宇都宮氏は、その名のとおり宇都宮明神(二荒山神社)を統括する神官領主でありながら、宇都宮という神域を囲む町場と下野の神領を統治する地域領主、さらには鎌倉幕府の有力御家人という三つの側面を基礎にした下野を代表する一族である。

一方で、平安時代後期にさかのぼる一族の成立以来、京都やその周辺との深いかかわりを保っていたことも宇都宮氏の重要な側面である。たとえば、鎌倉時代、京内に邸宅や宿所を構えていたことが確認されており(『明月記』ほか)、また、宇都宮氏の家法「宇都宮家弘安式条」には、菩提寺の一つとして京都の往生院(現三鈴寺)や善峯寺が挙げられている。宇都宮氏が系図上で祖と主張する宗円は、三井寺(滋賀県大津市)の僧として活動していた実在の人物があてられたが、このことは

一族の在京活動が系図に強く反映した結果と考えられている。

このような宇都宮氏による在京活動は、京都やその周辺を中心に宗教や文化面で優れた功績を残している。なかでも、一族の信仰を象徴する東大寺(奈良県奈良市)とのかわりや、歌人藤原定家との交流を契機とする宇都宮歌壇の成立が代表的である。今回は一族と東大寺とのかわりについて紹介する。

東大寺大仏殿には、本尊盧舎那仏坐像の両脇侍として「如意輪観音坐像」「虚空蔵菩薩坐像」(ともに国指定重要文化財)が安置される。現存する脇侍二像は、永禄10(1567)年、松永久秀の兵火による焼失を受け、江戸時代中期(18世紀)に再興されたものである。焼失した脇侍二像は、鎌倉時代初期に造立されたものであった。

源平合戦のさなかの治承4(1180)年12月、東大寺大仏殿は平重衡の焼き打ちによって焼失した。翌年、俊乗房重源が後白河法皇から大勲進職に任命され、復興が進められたが、当時、宇都宮氏の三代当主朝綱が仕えていた源頼朝は、復興に当たった援助者の一人であった。

鎌倉幕府が編纂した史書『吾妻鏡』の記述から、建久5(1194)年の段階で、頼朝は脇侍二菩薩像と四天王像の造立を御家人に命じていたことがわかる。脇侍二菩薩像のう



宇都宮朝綱と仏師快慶の接点を示す地藏院(益子町上大羽)

ち、左脇侍観音菩薩像の造立を命じられたのが朝綱であった。

弘安7(1284)年に記された「東大寺大仏殿図」(国宝、醍醐寺蔵)によると、観音菩薩像は法橋定覚と丹波講師快慶の二人によって、半身ずつ造り上げられた。朝綱開山と伝わる地藏院(益子町上大羽)には、鎌倉時代初期の快慶作ともいわれる「観音菩薩跪像・勢至菩薩立像」(栃木県指定文化財)が安置されている。これらから、朝綱が鎌倉時代の代表的な仏師快慶と接点を持っていたことが指摘されている。

宇都宮氏が京都やその周辺に残した遺産は後世一族にとって誇りであり、一族のアイデンティティとさえなったはずである。なかでも、その先鞭をつけた東大寺大仏殿の復興への協力には大きな意義があったであろう。東大寺を訪れた際には本尊盧舎那仏坐像とともに、現存する両脇侍像をとおして、宇都宮氏一族の厚い信仰心を象徴した観音菩薩像をぜひ想像していただきたい。